



カリキュラム・マネジメント

一斉休校や夏期休暇短縮など、コロナ禍により全国の学校が年間計画の変更を余儀なくされたと思います。授業時数が不足し、カリキュラムの再編に奔走される先生方に對し、「今こそ、改めて知恵を絞る必要があります」と語る、田村知子先生にお話を伺いました。

今こそ、学校は何のためにあり、どのように生徒の資質・能力を育むか全員で考えるとき

有事も平常時も、学校が目指す生徒の成長は同じ

今も続いていると思います。

それらの対応に、「何のために? 何を? どうやって?」を問われ、全教職員が共に知恵を絞る機会になったのではないかでしょうか。実はそれこそがカリキュラム・マネジメントの本質なのです。

2020年は全国の学校が予測不能な有事に直面し、先生方は暗中模索の対応に苦慮されてきたと思います。全国一斉臨時休業によって、生徒と対面する授業、行事や部活もできなくなり、登校再開後は授業時数が足りず、夏休みを短くするなど、すべての学校が

て判断し、いかに限られた時数を有効活用したカリキュラムにするかの工夫だと思います。

そうした意味で、これまでカリキュラム・マネジメントに取り組んでいた先生方にぜひご留意いただきたいのは、「学習指導要領＝教科書」ではなく、「教科書を終わらせる」と「教育課程をやりきること」ではないということです。生徒に「どのような資質・能力を育むか」を考えることが第一で、

そもそもカリキュラム・マネジメントとは、自校や目の前の生徒の課題をどう育成するかを、教員一人ひとりが創造的に授業やカリキュラムの開発に努め、学校のカリキュラムとして共有化・更新していく戦略的かつ課題解決的、組織的の営みのことです。

カリキュラム・マネジメントは組織的な学校の営み

今年度のカリキュラムの再編を迫られました。登校が再開しても感染予防のためにいつもとは違う教室の風景で授業をしなければならず、大変な苦労が

カリキュラム・マネジメントに組織的に取り組み、生徒を全人的に育成していくには、中央教育審議会が論点整理でまとめた、「教科横断的な視点での組み立て」「教育課程の実施状況の評価」。

私が研修や講演を依頼される学校の方々からは、「カリキュラム・マネジメントとはそもそも何ですか?」「何か始めるといいでですか?」という質問

取材・文／長島佳子
撮影／平野 愛(田村知子教授)

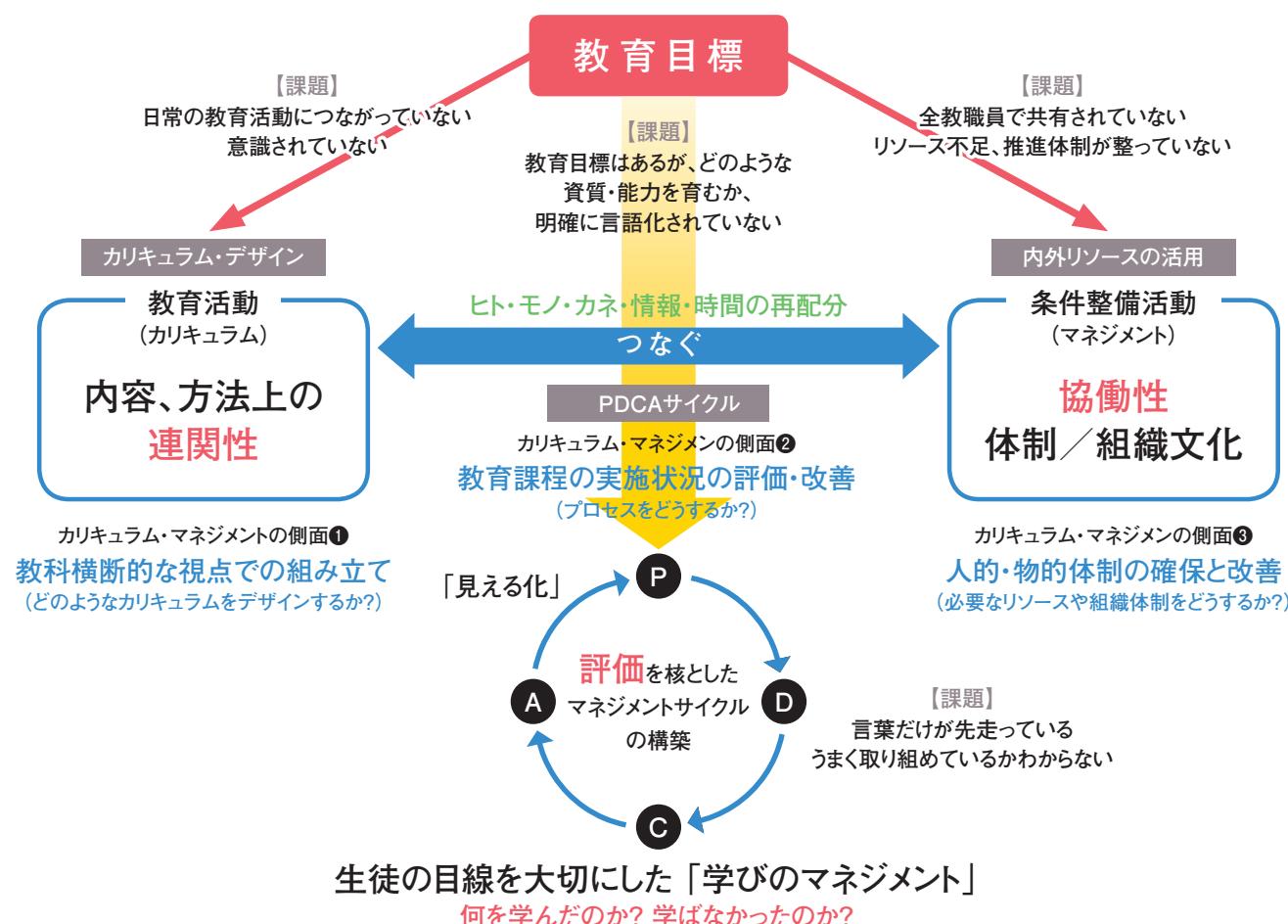


大阪教育大学
大学院連合教職実践研究科
田村知子教授

たむら・ともこ●九州大学大学院人間環境学府博士課程単位取得退学。教育学博士。中学校・高等学校教諭、岐阜大学大学院准教授等を経て現職。専門は、カリキュラム・マネジメント、教員研修、学校経営。カリキュラム・マネジメントに関する著書・共著多数。



図1 カリキュラム・マネジメントのアウトラインとよくある課題感 *田村先生のお話を参考に、編集部にて独自作成



改善」「人的・物的体制の確保と改善」という「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」が必要となります。

以下、カリキュラム・マネジメントについて直面しがちな課題に触れながら、意識していただきたい点についてお話しします。

カリキュラム・マネジメントを立てたら、それを教職員、生徒全体が常に意識できるように、あらゆる場面で繰り返し確認することも重要です。例えば名刺に教育目標を書いている学校もあります。また、入学式や始業式などの校長のお話も教育目標を意識したり、文化祭などの行事では生徒たちがキャッチフレーズを作ると思うので、そのキャッチフレーズが教育目標に合っているかをすり合わせるなどです。

カリキュラム・マネジメントにおける教育目標とは、目の前の生徒たちをきちんと見て、卒業するまでにどんな生徒へとたどり着いてほしいかを具現化したものです。目標が具体的でない、授業設計などの教育活動に結びつきにくいからです。

新しい学習指導要領は資質・能力ベースになっています。教科書の内容だけでなく、「その内容を教えた結果、生徒は何ができるようになったのか？」が問われています。

カリキュラムを組み立てるときは、先生方が実施する教育活動が、資質・能力ベースで具体的に立てた教育目標の実現に向かうよう意識することが欠かせません。

教科科目ごとに分離されたカリキュラムは、該当教科・科目で育もうとする資質・能力の育成には効率的ですが、全人的ではありません。そこを補うために総合的な探究の時間などの授業

教育目標は具体的に表現 どんな資質・能力を育むか

学校には必ず校訓や目指す生徒の育成像があると思いますが、伝統的に受け継がれてきた校訓は抽象的で大きすぎるものや、画餅化していることも少なくありません。

カリキュラム・マネジメントにおける教育目標とは、目の前の生徒たちをきちんと見て、卒業するまでにどんな生徒へとたどり着いてほしいかを具現化したものです。目標が具体的でない、授業設計などの教育活動に結びつきにくいからです。

多様な「つながり」が 社会で役立つ学びを創る

カリキュラムを組み立てるときは、先生方が実施する教育活動が、資質・能力ベースで具体的に立てた教育目標の実現に向かうよう意識することが欠かせません。

卒業する姿を見たいですか」と問いかけています。そして、「その姿に育てるためには、どんな授業や教育活動に力を入れますか」と尋ねると、普段実践されていることが教育目標からスタートしているか、取組は目標と結びついでいるかどうかに気づきます。

教育目標を立てたら、それを教職員、生徒全体が常に意識できるように、あらゆる場面で繰り返し確認することも重要です。例えば名刺に教育目標を書いている学校もあります。また、入学式や始業式などの校長のお話も教育目標を意識したり、文化祭などの行事では生徒たちがキャッチフレーズを作ると思うので、そのキャッチフレーズが教育目標に合っているかをすり合わせるなどです。



図2 カリキュラムマネジメント・チェックリスト(抜粋)

質問項目	全く あはまらない	あまり あはまらない	だいたい あはまらない	非常に あはまらない
学校の教育目標や重点目標は、「生徒につけたい力」「めざす生徒像」として具体的に記述されている。	4	3	2	1
各教科等の教育目標や内容の相互関連が一目でわかるような教育課程表(全体計画や年間指導計画等)が作成されている。	4	3	2	1
教職員は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	4	3	2	1
少なくとも年に一度は、学校の教育目標や重点目標の達成度を測っている。	4	3	2	1
生徒のアイディアや意見を取り入れ、生徒と共に教育活動を創りだしている。	4	3	2	1
教育課程の編成、評価や改善には全教職員が関わっている。	4	3	2	1
教職員は、学校の教育目標や重点目標について、その意味を具体的に説明できる。	4	3	2	1
挑戦が奨励され、挑戦の結果失敗しても個人が責められない安心感がある。	4	3	2	1

私は、学校の教育目標や重点目標についてその意味を具体的に説明できる。	4	3	2	1
私は、年間指導計画を、生徒の実態に応じて、柔軟に変更しながら実施している。	4	3	2	1
私は、学校の教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。	4	3	2	1
私は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	4	3	2	1
私は、校長が示したビジョンや方針を十分理解している。	4	3	2	1
私は、学校が力を入れている実践(特色)を具体的に説明できる。	4	3	2	1
私は、自分の担当学年・教科だけでなく、学校の教育課程全体で、組織的に生徒を育していくように意識している。	4	3	2	1

田村先生編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』より抜粋。リーダー用が84項目、個人用が45項目ある。

私は、学校の教育目標や重点目標についてその意味を具体的に説明できる。

私は、年間指導計画を、生徒の実態に応じて、柔軟に変更しながら実施している。

私は、学校の教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。

私は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。

私は、校長が示したビジョンや方針を十分理解している。

私は、学校が力を入れている実践(特色)を具体的に説明できる。

私は、自分の担当学年・教科だけでなく、学校の教育課程全体で、組織的に生徒を育していくように意識している。

が日本のカリキュラムにはあるわけですか。学校全体の教育目標を実現するためには総合的な探究の時間のような、教科横断的な組み立てが必要となります。「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」の一番目にも「教科横断的な視点」があり、教科横断が強調されているのが今回の学習指導要領のボイントの一つだと改めて確認しておきたいところです。

「学校での学びが自分の生活や将来に活きて」と生徒が感じる関連性を「リバランス」と言います。カリキュラム・マネジメントでは「連関性」という言葉を使っています。要は「つながり」です。異教科でコラボするクロスカリキュラムの授業も有効です。例えばある学校では、国語と美術のコラボで、美術館の作品の紹介文を生徒たちが作って展示了してもらえるという授業がありました。美術鑑賞と国語表現という教科横断だけでなく外部資源にもリンクしていく、リアルな学びを生徒が体験で

きています。こうした授業を年に数回できれば良いと思います。単なる体験学習に終わらず、生徒意識した取組を行い、原理や法則性を生徒が理解して、実社会で使いこなせるほど知が高まるカリキュラムを実践しようということです。

「目標と授業」「目標と評価」「単元と単元」「学校と地域」などの連関性を意識した取組を行い、原理や法則性を生徒が理解して、実社会で使いこなせるほど知が高まるカリキュラムを実践します。「先生が生徒目線に、生徒が先に立つことが、学習効果を最大化する」と教育研究者のジョン・ハットィが説いています。生徒自身が何をどう学びたいと思っているか引き出しながら、授業を組み立てられると良いですね。

個人としてカリキュラム・マネジメントを意識して取り組まれている先生もいます。育つてほしい生徒像に向けて、本質的な問いを投げかけるように授業を工夫し、実践的な課題も与えて、3年間を見通したメリハリのある授業をされている先生がいたら、「そこから学ぼう」という意識をもつて、研修会などでその先生の授業を真似してみるのも良いと思います。共に学び成長していく教員組織の文化が生まれれば、組織としてカリキュラム・マネジメントができます。そこでカリキュラム・マネジメントの目的は、生徒の成長であり、生徒の「学びを最大化」することです。

生徒が「学べているか」 取組の結果を評価・改善

熱心に取り組もうとするあまり、カリキュラム・マネジメント自体が目的化すると本末転倒になります。カリキュラム・マネジメントの目的は、生徒の成長であり、生徒の「学びを最大化」することです。

「カリキュラム」とは教育課程のことだけでなく、「生徒の学びの総体」、つまり



けでなく、生徒の成長という視点で学校全体で共有・分析するなどです。

また、生徒にできるようになってほしいことを言語化したルーブリックで評価することもできます。例えば、先生が集まつて、実際の生徒たちの姿を項目ごとに3段階くらいに分けて付箋で貼つていくと、「今この段階の生徒が多いよね」とか「上の段階にあげるために何をすればよかつたのだろう」と、議論すること自体がカリキュラムの評価となります。

また、一問一答式の「カリキュラム・マネジメント・チェックリスト」(図2)を作成していますので、カリキュラム・マネジメントができているかの確認に活用していただければと思います。

型に「こだわらずに柔軟に生徒と共に学校文化に

目標を立てて取組を計画し、評価・評価し改善するプロセスを踏んでいく

生徒の学びについて、今回の学習指導要領では「教授」よりも「学習」がクローズアップされています。先生が教えることよりも、生徒が主体的に学ぶことに比重が置かれると、「教員の取組に対する評価はどうするのか」という疑問が出てきます。

一つは、生徒に尋ねればいいと思います。節目ごとに授業アンケートを取ると思いますので、先生個人が読むだ

り、実施した取組によって「生徒たちが何を学んだのか／学ばなかつたのか」も含みます。それを明らかにして、評価し改善するプロセスを踏んでいくのです。

生徒の学びについて、今回の学習指導要領では「教授」よりも「学習」がクローズアップされています。先生が教えることよりも、生徒が主体的に学ぶことに比重が置かれると、「教員の取組に対する評価はどうするのか」という

現場の声から生徒課題を共有化。授業改善から学校改革へと進化

多治見高校(岐阜・県立)

カリキュラム・マネジメント実践中の学校事例

「真面目だが自己肯定感が低く積極性に欠ける」。こうした生徒課題が現場の先生たちの声から上がっていた多治見高校は、2015年度から授業改善に着手。アクティブラーニング(以下A-L)の実践・研究に全校で取り組んできた。しかし、A-Lでは一部の活発な生徒の活躍だけが目立つなど、さらなる課題が出てきた。

そこで、個々の教員が取り組むA-Lから、授業改善も含めて学校全体で生徒課題を解決するための学校の在り方を考える学校改革へと視座を高め、昨年度からカリキュラム・マネジメントに着手している。

まず、「進取・努力・創造」という校訓とは別に、授業のなかで再現できるような具体的な教育目標の策定に向けて、全教員から教育目標案を募集し研修会を実施。さらに、保護者や地域へ新たな感染拡大防止の対応など、予測不能なことは今後も起こることが十分に考えられますので、柔軟に対応する構えが必要です。普段の取組が、学校の目標につながつていて、生徒が目標通りに成長しているかを意識的に確認していくことから始めればいいのです。

目標を立てて取組を計画し、評価・評価し改善するプロセスを踏んでいくのです。改善を繰り返すと言いましたが、新たな施策をゼロから始めなければならぬということでは決してありません。新たに感染拡大防止の対応など、予測不能なことは今後も起こることが十分に考えられますので、柔軟に対応できるように育てるか」を具体的な言葉でまとめあげた。

昨年度は、クロスカリキュラム授業を実施。カリキュラム・マネジメントの教科横断的な視点を意識し、文理の科目を組み合わせることで生徒たちの得意科目が2方向になり、輝ける生徒が一つの授業のなかで増えるからだ。

「私は化学担当で、地理の児玉先生とのコラボ授業を行い、知識だけでなく考える力をつける授業を組み立てました。当初は、『入試に使えるのか』と生徒たちが考えるかもしれない葛藤がありました。ですが、生徒たちからは『斬新だった』『いろんな見方がわかった』とおおむね好評でした」(杉本先生)。



前列左より、吉田浩之教頭、鈴木彰校長。後列左より、児玉奈子先生(地歴・公民)、天野智生先生(国語)、杉本真弥先生(化学)。

